



Data

監督・脚本：ニテーシュ・ティワ
リ

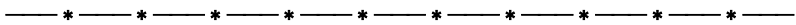
出演：アーミル・カーン／ファーテ
イーマー・サナー・シャイク
／サニャー・マルホートラ／
ザイラー・ワシーム／スハー
ニー・バトナーガル／サーク
シー・タンワル／アパレシヤ
クティ・クラナー

👁️👁️ みどころ

日本女子レスリング界において、吉田沙保里、伊調馨、浜口京子の3選手は大人気。ALSOKのコマーシャルがそれを後押ししたが、近時の伊調選手に対するパワハラ問題は実に遺憾！しかし、インドでは女子レスリングの認知度は低く、マハヴィルは国内の頂点に立ったものの国際試合へのチャレンジは諦めることに・・・。

ならば、俺の夢は息子たちに・・・。ところが、生まれてきたのは女、女、また女、女。こうなれば『若草物語』(49年)や『細雪』(83年)、『シネマ21』93頁の世界だが、いやいや女の子だって・・・。そう考えたところから、インドに「スポ根もの」の本作が誕生し、大ヒット！しかし、今ドキこんな子どもの人権無視が許されるの・・・？

最初から大筋はミエミエ。また、『あゝ、荒野 前篇』(17年)『あゝ、荒野 後篇』(17年)のようなドラマ性もなく、一貫して描かれるのは父娘愛だから、そのストーリー展開もミエミエ。そう思っていたが、いやいや！さすがの脚本とさすがの演技に、思わず私は涙ポロポロ状態に・・・。



■□■最初の子供は絶対男！ところが・・・■□■

一人っ子政策のうえ男尊女卑の風潮が強かった中国では、最初に生まれてくる子供は絶対男でなければ！それが一般的な価値観だったが、それはインドでも同じだったらしい、しかも、レスリングの国内大会ではチャンピオンになったものの、生活のために世界大会での金メダルの夢を断念した男マハヴィル(アーミル・カーン)は、妻ダーヤ(サークシ

一・タンワル)との間に生まれてくる子供に、自分の果たせなかった金メダルの夢を託していたから、最初に生まれてくる子供は絶対に男!そう願いかつ信じていた。ところが、現実には女……。これには大いに失望したが、1人目がダメなら2人目があるさ!しかも、インドにだって男と女を産み分けるさまざまなテクニックがあるから、それを実践すれば必ず!マハヴィルはそう考えたし、さまざまな知恵を授けてくれた識者(?)達も、次に生まれてくるのは男の子だと確信したが、またも結果は女の子……。インドに産み分けの神様がいるのかどうかは分からないが、なんとマハヴィル家は3人目も4人目も女の子だったから、アレレ?……。そんな神様のいたずら(?)の前に、マハヴィルはさすがに男の子の夢とその子にレスリング世界チャンピオンの夢を託すことをあきらめ、飾っていた国内大会の金メダルを引っ込めてしまったのは仕方なし……。?

マハヴィル家の4人姉妹は順調に育ったが、それでは何の物語にもならない。しかし、ある日マハヴィルが家に帰ってみると、長女ギータ(ザイラー・ワシーム)と次女バビータ(スハーニー・バトナーガル)からボコボコにされたという男の子とその家族が泣きながら苦情の訴えを……。マハヴィルが「どうやって男の子をやっつけたのか?」と聞くと、2人の娘は素早い膝蹴りと肘打ちの技を見せつけたからアレレ……。女の子ながら、どうもこの2人は父親のレスリングの才能を引き継いだらしい。これなら、女の子でも鍛えあげれば……。

■□■4人家族なら「若草物語」「細雪」いやいや、スポ根も!■□■

4人姉妹の物語ではルーイーザ・メイ・オルコット『若草物語』と谷崎潤一郎『細雪』が有名。そこでは、淑やかさの中に『若草物語』なら、二女ジョーの作家の夢に向けての生きざまがあり、『細雪』なら、お見合いを繰り返す三女雪子のような生きざまがあった。他方、女子の「スポ根もの」では『アタック No.1』(68~70年)が有名だし、男子の「スポ根もの」では『巨人の星』(66~71年)がそれに並んで有名。また、大関貴乃花の息子で、2人とも横綱になった「若貴兄弟」や、ボクシング界で有名になった「亀田三兄弟」、更にはアニマル浜口(父親)と浜口京子(娘)の父娘などの事例をみれば、「スポ根もの」は現実のものにもなっている。しかして、マハヴィルは生まれてきた4人の女の子のうち、長女ギータと次女バビータをレスラーに育てることを決意。そして、マハヴィルはギータとバビータの意思を確認することなく、妻ダーヤとの間で1年間はその方針でいくことを決定。ギータとバビータはその日だけは甘い物を食べさせてもらえたが、その後は一切甘いものを口にすることが禁止されたのはもちろん、朝5時からの特訓が始まったから大変だ。

『アタック No.1』も『巨人の星』も、日本では高度成長期の昭和の時代だったからあんな「強制」も許されたが、「子供の人權」が叫ばれ、「いじめ」が厳禁とされている昨今では、いくら父親でも本作に見るような「押しつけ」や「強制」は絶対無理。日本人なら誰でもそう思うはずだが、21世紀に入ったばかりのインドの片田舎では、まだそれが許さ

れていたらしい。もっとも、本気でそんな夢を追っているのはマハヴィルだけで、村人達はかつてのレスリングの国内的スターだったマハヴィルを尊敬しつつ、その子育てぶりには失笑し、あきれ気味。そのため、猛特訓を経て長女ギータが男の子の大会への正式出場の参加を申し出ると、主催者たちがそれを丁重に断ったのは当然だが・・・。

■□■たちまち女子レスリング界のホープに！■□■

モンゴルにモンゴル相撲があることと、その実力は、大相撲におけるモンゴル勢の大量進出と横綱・大関の地位を席卷することによって明らかになっている。しかし、インドの少年たちが砂の上のレスリングをやっていることを、あなたは知ってる？私はそれを本作ではじめて知ったが、そんな少年たちがやっている砂の上のレスリングと、マットの上でポイント制で争われる正式のレスリング競技との間にどのような接点があるのかは、本作を観ているだけではよくわからない。しかし、なぜか男の子たちの中にただ一人混じって戦った砂の上のレスリングで頭角を現したギータは、その後正式の女子レスリングの競技に参加することに。すると、それまでの対戦相手の男子よりはるかに弱い女子を相手にするギータは破竹の進撃を開始し、たちまち国内戦のトップに上り詰めることに。

ここまでのストーリーは半分マンガのようなもので、こんな単純な作りのスポ根ドラマがなぜインド映画世界興収史上No.1になったの？と思えてくる。しかし、私は、①少年時代のギータとバビータが、ある日青年期のギータ（ファーティマー・サナー・シャイク）とバビータ（サニャー・マルホートラ）に切り換わる瞬間に全然違和感がないこと。②『PK』（14年）（『シネマ39』308頁）ではド派手なアクションが目立っていたインドの国民的俳優アーミル・カーンが、本作では寡黙で一徹な頑固おやじ・マハヴィル役に見事に徹していること、等にそれなりの好感を持って観ていくことに。そして、2人の主人公が幼少期から青年期に入れ替わり、マットを舞台に戦う女子レスリングの世界に入っていくところから本作の本格的ストーリーが始まることになる。

インドではレスリングに対する国家的な支援体制が弱かったため、マハヴィルは国際大会に出場することができなかったが、もはや国内の女子レスリング界では向かうところ敵なしとなったギータを国際大会に出場させ、そこでの金メダル獲得を目指すためにはどうすればいいの・・・？今やマハヴィルの検討テーマはその一点になったが、そうなる私たち日本人の観客のイメージも、たちまち吉田沙保里、伊調馨、浜口京子らの世界と同調していくことに・・・。

■□■一人立ち（＝父離れ、子離れ）は如何に？■□■

日本ではAL SOKの商業に吉田沙保里、伊調馨が登場している。また、日本では伊調馨へのパワハラ問題が発生し、日本レスリング協会の強化本部長であった栄和人氏が謝罪文を発表し辞任する事態に発展している。他方、女子レスリング界で父娘の二人

連れで有名になったのが、アニマル浜口と浜口京子の父娘だ。本作前半に観るマハヴィルとギータの父娘一体になっての女子レスリング界の活躍は、まさにアニマル浜口と浜口京子と同じだ。しかし国際大会に向けて、ギータをインドの国立スポーツ・アカデミーに預け、その指導も専属コーチに一任することになると、事態は一変。マハヴィルと専属コーチとの間で指導方法の違いが鮮明になっていくことに。普通、娘はそんな時戸惑うものだが、本作ではそれまで父親によって抑圧されていた自由を一気に取り戻したギータが大きく変化していくサマが顕著だから、それに注目！

ギータの少女時代は父親の指導（圧制？）の下で、食事趣味も女の子の楽しみもすべて封印され、髪まで切られてきたが、一人国立スポーツ・アカデミーに入り、専属コーチの指導を受けるようになると、食事趣味も自由。さらに、化粧も髪形もオシャレも自由になったから、ギータは大喜びだ。もちろん、専属コーチ指導の元で練習には励んでいたが、次第に「ギータは攻撃型だ」とするマハヴィルと、「防衛型だ」とするコーチとの間に、ギータの育て方を巡って対立が発生！また、1位にならずとも2位、3位になれば立派だとするコーチと、何がなんでも1位でなければと考えるマハヴィルの間にも根本的な対立が！そんな環境の変化の中、ギータは期待を背負って国際大会に出場するものの一回戦で敗退続き。これは一体何故？

そんな状況下、ある日里帰りしたギータとマハヴィルとの間で考え方の違いが顕在化したのは当然だ。そのため、遂にある日、旧来のやり方のマハヴィルと、新しいコーチの指導方針を信頼するギータが直接対決することに。その勝負の結果はあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、大切なのはその結果ではなく、この勝負によって父娘の生き方の方向が完全に分かれてしまったこと。いつの日か娘が父親から一人立ち（＝父離れ、子離れ）するのは必要不可欠だが、こんな喧嘩別れのような一人立ちでいいの・・・？さらに、父親の下で指導を受けている妹のバピータは今なお父親のやり方を信じて国内チャンピオンを目指していたから、姉妹の間ではお互いの信じるやり方で前に進もうと約束してきたが、さてギータとバピータ二人の明暗は・・・？

■□ 『ああ荒野』は最高だったが、本作も！ ■□

ボクシング映画は名作が多い。『ロッキー』シリーズ（76～06年）をはじめ、『シンデレラマン』（05年）（『シネマ8』218頁）等がある。また、『あしたのジョー』（11年）（『シネマ26』208頁）も良かったし、今年の『あゝ、荒野 前編』『あゝ、荒野 後編』に観た沢村新次と二木建二のボクシングのシーンは最高だった。他方、レスリング映画でも、『レスラー』（08年）（『シネマ22』83頁）は最高だった。これらはいずれもクライマックスとなる試合に向けてのドラマの作り方がポイントだが、本作はインドの女子レスリング界におけるマハヴィル家の実話に基づく物語だから、脚本上のテクニクは自由でも、歴史的事実を変えることはできない。そのため、どうしても盛り上がりの面でイマイチ・・・？本

作鑑賞前から私はそう予想していたが、しかし・・・。

レスリングは2分間で3ピリオド制の試合だから、3分間で10～15ラウンドを戦うボクシングの試合よりは短い。したがって、一度ポイントで優位に立つと、後は時間稼ぎになるきらいがある。しかし、近時世界的に有名になった、吉田沙保里、伊調馨、浜口京子らの活躍を見ていると、女子レスリングは結構面白い。そして、そんな目で本作のスクリーン上におけるギータの試合ぶりをみていると、それもかなりすごい。マハヴィルはもちろん、ギータもバビータもすべて俳優たちは、本作のために身体作りをし、技を練習し、現実 realistically 中継と合うように戦っているそうだから、本作後半では、ギータの試合の迫力を直接感じ取りたい。さらに、高等テクニックとしては、ギータがコーチの指示に従っているのか、それともお互いの信頼関係の復活がなった父親マハヴィルの指示に従っているのかも、じっくりあなたの目で見定めてもらいたい。

■□■思わず涙！ラストには意外な父娘の物語にも！■□■

キネマ旬報4月下旬号の「REVIEW日本映画&外国映画」における3人の評論家の本作の採点は、星4つ、3つ、2つと分かれている。私も本作は「スポ根もの」だと最初からわかっていたし、前半での父親の横暴ぶりを見ていると、そりゃ如何なもの？と思う面も多かった。しかし、後半からのちょっと泣かせる父娘間と長女次女間の絆を軸とした家族ドラマを観ていると、思わず涙が・・・。これは70歳近くになって涙もろくなったせいで、必ずしも作品の完成度が高いせいではないと思っていたが、ラストのクライマックスに向けての面白い伏線作りを観ているとなるほど、なるほど・・・。国際大会に向けて、専属コーチと父親との意見の対立がピークに達するのは最悪。そのため、一時はギータとバビータの国際試合への出場さえ危うくなったが、マハヴィルの国立スポーツ・アカデミー施設への立ち入り禁止、父娘の面会禁止の処置で免れたのはラッキーだった。そんな中、マハヴィルのギータへの指導は如何に？そしてまた、ギータの試合に向けての戦略、戦術そして心構えの立て方は如何に？しかして、一回戦と準決勝での戦いの中に父親の影響を感じ取った専属コーチは、決勝戦に向けて、ある「小汚い策略」を弄し、それを実行するところが、本作クライマックスのポイントになるので、それに注目！

観客席に父親の姿を見ることができないギータは、不安の中で最強の敵との決勝戦に入ってしまったが、ポイントをとられ、次第に劣勢に。このままでは逆転不可能と思われる中、ギータの頭の中、胸の中をよぎった父親の言葉とは・・・？女子レスリングのポイントは、1点、2点、3点、5点の4種類だが、5点のポイントはどんな場合に？そして、最後の最後、ラスト0秒か否かの瞬間に出たポイント5点の大技は決まり、世紀の大逆転はなったの？それができたとすれば、その要因は一体何？思いもかけなかった脚本の中で展開されるそんなクライマックスに、私の目からは大粒の涙が。どうもこれは、涙もろくなったせいばかりではなさそうだ。

2018（平成30）年4月11日記